

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

まえがき

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008933

まえがき

鉄鋼鉱石を運ぶ貨物船に便乗し、太平洋を渡って私がはじめてアンデスの土地を踏んだのは、今から40年以上も前の1968年10月のことであった。当時、私は京都大学農学部の学生で、アンデスにおける栽培植物の起源に関する調査隊を組織、そのメンバーとして1968年から翌年の3月までの半年近くにわたって車でボリビアやペルーなどの中央アンデス地帯を踏査したのである。その踏査地域は、はからずもインカ帝国に代表されるアンデス文明の舞台になったところであった。そのため、アンデス各地でインカやプレインカ時代の壮大な遺跡を目にすることができた。また、博物館では華麗な金銀製品や色鮮やかな織物なども見ることもできた。

こうして私はアンデス文明に関心をもつようになったが、私に最も強烈な印象を与えたのは、壮大な遺跡でも華麗な金銀製品でもなく、道中で目にした先住民の人たちの姿であった。彼らこそは、かつてインカ帝国を築いた人たちの子孫であったが、私の予想とは違って、みんな貧しそうであった。また、労働も厳しそうであった。富士山の頂上ほどもある標高4000m前後の高地で、雨にぬれながら鋤をふるい、鋤で畑を耕す人たちが少なくなかった。また、雪が舞い散る高原にうずくまり、寒さに震えながら家畜番をする子どももあちこちで目にした。

そこで、この調査から帰国後、私はアンデス先住民の人たちがどのような暮らしを送っているのかを調べてみたが、そのようなことを書いてある本はまったくなかった。また、欧文の文献でも詳しく知ることはできなかった。とくに、私が大きな関心をもっていた食糧の生産や消費、すなわち農耕文化に関する記述はきわめて乏しかった。先住民の人たちと食住をともにして長期にわたって調査をした研究者がほとんどいなかったせいであった。その原因のひとつは、アンデス高地の高さのせいのようなのである。標高4000mあたりでは酸素が薄く、寒さも厳しそうである。また、スペイン人に征服された先住民社会は閉鎖的で、よそ者を容易に受け入れてくれそうにない。そのため、文化人類学者たちは高地の先住民社会での長期調査に二の足を踏んでいるようであった。

やがて私は、「文化人類学者がやらないのなら、自分自身でやってみようか」と考えるようになる。とはいえ、農学を専門にするかぎり、先住民社会での定着調査はできそうにない。一方で、農業を文化としてとらえ、それを調査すれば、アンデス高地の人びとの暮らしがよくわかりそうであった。それというのも、アンデス高地の先住民のほとんどが農耕民だからである。日本における農耕文化研究の第一人者であった中尾佐助も次のように述べている。

「農業を、文化としてとらえてみると、そこには驚くばかりの現象が満ちみちている。ちょうど宗教が生きている文化現象であるように、農業はもちろん生きている文化であって、死体ではない。いや、農業は生きているどころではなく、人間がそれによって生存している文化である。消費する文化でなく、農業は生産する文化である」[中尾 1966]。

こうして、1976年秋、私は国立民族学博物館（民博）への就職を機に、農学から民族学に転向し、中央アンデスの農耕文化の研究に本格的にとりかかることを決意する。1978年秋、農学で博士論文を提出したあと、すぐにアンデスに飛び、ペルー・アンデスの先住民社会で民族学的な調査を開始した。その後も1990年はじめまで、私は民博よりもアンデスにいる方が長くなるほどフィールドワークに全力を投入した。残念ながら、この調査はペルーでの治安情勢の悪化のために中断せざるを得なくなったが、1990年代はじめから私はネパール・ヒマラヤで10名の研究仲間とともに長期にわたって何度も調査をおこなった。その後も、チベットやアフリカ高地でも調査をおこなったが、これらもアンデス高地の人びとの暮らしをさらに深く理解するための比較調査であった。

この結果、1968年に始めた私のフィールドワークは50回を超え、現地での滞在期間も10年あまりとなった。本書は、その成果のなかで中央アンデスの農耕文化に焦点をあて、世に問おうとするものである。ただし、本書はアンデス研究者だけでなく、他の地域を専門にする研究者にも関心をもってもらい、私の考え方に対して広く意見を求められるように、仲間うちにだけわかるような表現はつとめて避けるようにした。また、これからアンデス研究を始めようとする若い研究者に役立つことにも意を注いだ。そのため、できるだけ図表類や写真を多用するように努めた。なお、本文中、とくに断りのない写真は著者の撮影によるものである。

本書をとおして、中央アンデスの農耕文化、ひいてはアンデス社会に対する理解が少しでも深まれば、著者としては大きな喜びである。